

註解
古今圖書集成





二月部目録

△印あつた能借の
季と持りの人

○養生の法。雨風の考。家の計
師の妙業。その外人家。蓮室の
外々。よ。秘多ありゆへ
同録ふらさるる事

二月

卦 月支 調子
陰陽生 異名

秘

△驚蟄節

七十二候
占候

秘

△春分中

七十二候
占候

秘

月日令

二月日の定りたる事。千支の
こと。さるること。さるること。

△中和節

酒
△献生子

秘

上春服

△吉野餅配

秘

△南二月堂行

△秋奠

秘

△初午

△水間祭

秘

△東福寺藏法

△六耶泰

秘

初午諸祭

△南都春日祭

秘

△近本妙寺詣

△大原の祭

秘

二月部目録



△八幡初卯	△園禪神祭
踏青節	迎富
賜尺	蚕農市
萬神都會	△出代
△行基祭	△二日灸
△祈年祭	△新能
△岩宮能	
祇園八講	△夜經會
泉涌寺倉開懸	△貴船五穀祭
△列見	百花朝
△三月堂水取	△花朝節
△涅槃會	△二月の別
△佛の別	△さり佛
△暖峯柱炬	△天壽常樂會
△真福寺常樂會	△彦山祭

日八廿 日五廿 日二廿 日廿 日九廿

△餅花奠	△積塔
△貝寄	△觀音誕辰
△浅間祭	△普賢菩薩
△天守聖霊會	△比良八講
△天神御忌日	△某種御供
天和の節	△道明寺祭
二月令	此部は日の上りたる二月
△彼岸	彼岸僧状
△天王寺祭	△天王寺踊念佛
△時宗踊念佛	△社日
男女嫁娶	△紙鷲
得子	△初雷
鵜鳥の圖	△候霜
△水口祭	△田畑野山焼
△季御讀經	

二月 目録

△燕 同巢	△引鶴 引鶴	△孕雀 雀の子	△孕鹿	△蜂 蜂の巢	△蝶	△蟾 蟾	△蛙子	△蒸 蒸	△蟻	△馬 馬	△虫
△歸雁	△鳥巢 鳥の巢	△松老鳥	△鹿角落	△虫	△蛙	△青蛙	△蟻子取	△田螺	△寄居虫	△馬	△虫
ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ

三必用 此部は風雨の占、破軍の
 他行の心機、作事の上り、料理
 等々の法、食物のよ、等々其外
 母と子の占、尤日の定、事ハロの日
 等の部、あり此部ハ日のこと、
 二月 二月 要用の
 三月 三月 終

二月之部

△此部あり、非僧の
 季、り、り、の、

當月の清風、脆月
 舒はて仲陽の氣
 整野外へ出て
 青艸と踏天
 氣と専ら受
 術、則扶陽の
 術、草木の
 田、答と、如く
 入、日、の、影、と、受、て



異名

△仲春 △陽中 △如月 △令月
 △夾鐘 △驚蟄 △春分

異名註

夾、鐘、ハ、
 夾、ハ、甲、也、而、の、物、也、

雅曰二月為如といふ、驚蟄、
 春分のこけハ二丁目、

○蔵玉 小草生月 頭照
 月、竹、竹、なる、ひ、さ、の、こ、ら

哥 梅は二月 友則

うぐいすのかよしの里の梅は
花をたると梅つこ月

哥 蔵王梅見月 有家

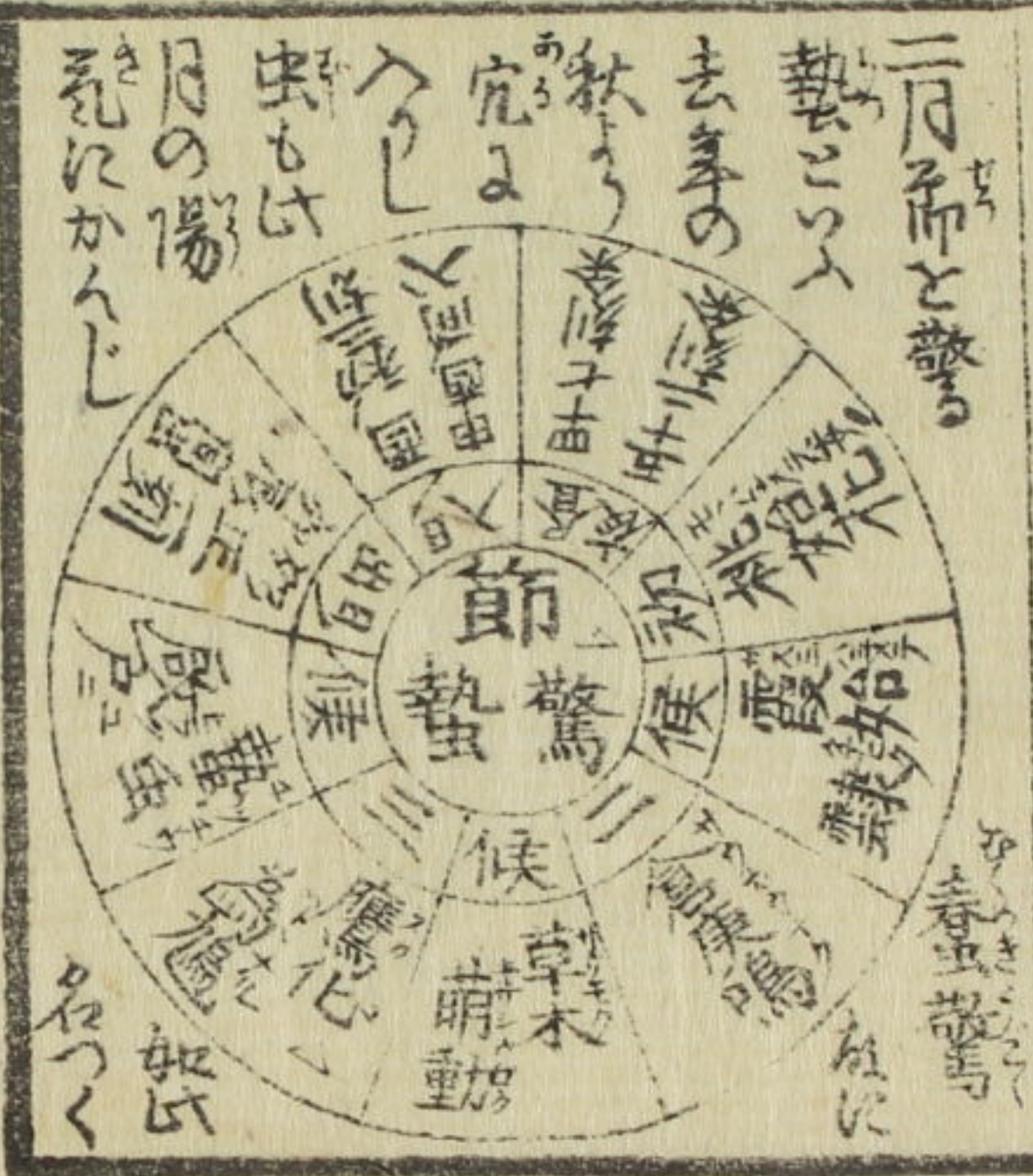
こころなれば梅の梅見月
風のふこけを種とみる

哥 莫信 雪消月

とみよてまらさすまの根の
ゆきこころの月のはもふれは

梅の花のさく本はそとに二月は

節 驚蟄。七十二候。草木芽二
候。昼夜長短日の出入等左記



○枕始花は枕の花はいらさきじまると
○倉庚は鶯の初名なり信はうひ

この日名とこれども後し倉庚は
鶯雛ツグヒス又カラツグヒスといひて系

大坂の辺に未だくまは(大さき)と
舌のつくさ(う)ひをに似たり尾

こねとま(う)毛あう(う)う(う)グヒス

小寒より二月より(う)知る(う)鷹は

陰類なる梅は陽類(う)仲春(う)は

さうなる(う)感(う)て(う)陰類(う)の(う)

も(う)陽類(う)の(う)梅(う)と(う)寒(う)と(う)る(う)なり(う)是

仲春(う)時(う)良(う)とい(う)つ(う)る(う)なり(う)孔(う)祀(う)出

梅(う)林(う) 節(う)の(う)日(う)る(う)殿(う)と(う)門(う)恒(う)か(う)

節占候 雷あれは(う)春(う)の(う)寒(う)也(う)

是(う)が(う)未(う)だ(う)傷(う)入(う)下(う)旬(う)雷(う)あ(う)れ(う)を

鶯(う)あり(う)を(う)し(う)と(う)ら(う)未(う)だ(う)に(う)あ(う)れ(う)は

冬(う)を(う)か(う)う(う)辰(う)己(う)よ(う)か(う)れ(う)は(う)い(う)る

ひ(う)あり(う)鶯(う)の(う)方(う)早(う)なり

妙術 朔日いそひ日出いでてさる
とれた遠志とんねんの心こころを去しりぞけ

てせんどり二杯ふたばいのこて又またてた出いだ
だせば疲つかれさうなるふとたかく

無病むびやうゆへに長壽ちやうじゆとせらるる
實まことに鬼神かみじんの奇まじ法ほうをたす

吉野餘配よしのあまらひ 朔日いそひ花はな供くわせ
法の兩行りやうかう入いり

本堂ほんだうへ出て御供奉ごくわん幣へい一ひとり
廣庭ひろにわふる餅もちをまうくさる

南都 西京藥師寺造花會
朔日いそひ七日ななひさそ金堂きんどう中

いろいろの遠とほく死しと供くわせ大法會
行いく俗しやく西京さいけいの死しとさるる云

二月堂行ふたつきだうかう 南都なんと之水みづ取とり
朔日いそひより十四日じゅうしにちまで

牛王ぎゆうわう加持かぢの修しゆ法ほうあり上うへ七日ななひ大像だいざう
觀音くわんおん下した七日ななひ小觀音せうくわんおん之の勤ごん僧そう必かならず

修しゆの僧そうとさるる
俳はいあふや修しゆの傍はたの出いれさる芭蕉ばしやう

大坂 天王寺六時堂修上會
有朔日いそひより三日さんじつ迄いた酉うしノ刻

上うへ丁てい日にち釋奠しやくけん 孔子こうしとさるる
二月ふたつき八月はちがつ兩度りやうど有あり

謚しを大先おほさき至聖しせい文宣王ぶんせんわうと申奉まをさる
朝あ廷ていよりより年毎ねんまいに大學だいがく寮りやう

孔子こうしをさるる人ひとと法ほうを
ては孔子こうしと教かへ子しとさるる大宰だいさい

府ふつとは孔子こうしと閔みん子し騫けんと依よ
みさしより延喜えんぎ式しきより文ぶん

武天皇むすめみかど大宝元年たうほうげんねん二月ふたつきよりは
まじりとなり後花園院ごえん寛正年かんせいねん

中ちゆうより終しゆうまで應仁おうにんの大乱だいらんより
絶たつり孔子こうしに上うへ一人ひとりより下した萬民まんみんふ

至しるまで天下てんか萬世まんせいの師しとされ本ほん
朝あらうさるる終しゆうひよりいへる毒どくく

に次つぎに詳しやうかりり〇禮記れいき王制わうせいより
秋あき葉は奠幣けんぺいとありあふ秋奠あきけんと和わ

訓くんふささるる
あしひら

土人形をうろは深草の名
おされながら古の松を折つてか
ざし海にさらし又も折つて
夫木 知衣

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

後拾遺

惠慶

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

頭伴

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

いさ山移のあさ葉をばはく
かへるいさるきさく人のもろ人

水間祭

和泉國水間觀音
行基の化聖武天

皇の勅願此日くはまの
年北正難を除く草薙をくは
排きつひ火や水者海で
の魁の先 復生 京 真如堂境
内にある系

京東福寺懺法
法六に六根

の罪と懺悔する修行は日名画
兆殿司の画の觀音の像世三幅と
かくるこ又十万の札とて火除の
守とがすの紙は十万の字をか
いて寺内同聚菴よりい出す

摩耶泰
樺州兔原郡畑原
村山上よりあり

母摩耶山切利天上寺と云天
武天皇の御時法道仙人の創造
かうけ日泰詣の人の福とぼる又
馬の無難と祈る土産もの見

布と賣是と摩耶毘布と云
山の絶頂へ絶景を搜播又四国の

山海一目にのぞきむるるるる
能 横腹のそ乃もはし 平耶系都文
狂 糸治の山の下からのなること
はよまやの親きこと 湖春

近江本妙寺詣 今ハ寺院設
たり旧跡ハ

三上山のほとろふあり今も
初 年よの清す帯分れまると土瓶上り

申上 南都春日祭 仁明天皇
嘉祥三年

九月始て中臣秀基奏聞とへ
て清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申の夜初て行ら其
式に次ぎて季 関白藤原家元

哥 壺川者三首 顯仲
恙てんたへいのらまてま日山
松のそえしひやまこころほく

ありの下たえごとを忍いとも
仲実 日 かつぐのふれ神とまつこと

詞 小車。多人数。義。切。南。南。三。岳。

如上 大原野祭 山城乙訓郡
京より西里

許西の春日の社と月神より
仁壽元年二月后宮御所の

け正、勸請なりたるなり又
大系社行幸さどもありたり

哥 年中行夏 經賢僧都
きろく死やり入神まうと一は心
こやうけそくよ花のさくゆ

伊勢物語

大京やと一はのふもくふと
神代のももねひいづら

詞 衣毛車。むろろ。そ。ほ。不。す。れ
排 大京を本も女にさぐれ宗國

京 八幡初卯。神系あり伶人
山井。多。豊。安。倍。ま。ご。ん。と。勤。

丑上 園韓神祭 古大内裏の
宮内省有後

林。屋。の。く。り。す。昔。ハ。二。月。十。日。に。終。る
衆議一人なる所に終て奉と終て

左の邊に醍醐井通あり 本意報云
非人曰くこれ其味の家を都支

不成 踏青節 二月民俗酒
日就日 踏青節 二月民俗酒

郊に出て拾賞とるを踏青とも
云聞中二日ともつてはまゝとする

占候 二日雨あれば登皇業
うらまひ 大はしき雨氷の早かる

迎富 携へてくるの法因酒と
とも樂て暮にうるこれを迎富

賜尺 唐制是日近臣
尺の尺とたき入

蠶農市 唐土蜀の國に
二月二日八日と西

日かいこか入りの道具と賣
ちり其あたひ致貫にいこつ

萬神都會 二日とりは日
夫婦のくと禁

出代 出替今日より来年二
月二日迄と奉公人の期

とす京大坂ハ三月五日
九月十日す年と期とす

行基参 津の玉昆陽川
致に有行基建立

ちり比し一目の甄ありて縁記
あり忠度のうたひは月も宿り

正行基昆陽院の雜事ハ
延喜式日僧

云々延元二年將軍弓矢素捨文有
ふつやいと 非示小豆煮る巫

二日灸 七日の灸部 如泉
非示小豆煮る巫

社 二日やいとまたとり合のさ
もてはも成てはるわらて

祈年祭 中災なく四時
なほめんし祈年祭

昔神祇宿まをける今いせは
二月一日

西日

二月一日

哥 年中行幸 長秀創臣
いのりて入世のとならぬ名を代を
そとせあまりの御やうくらん

京 六波羅御堂に侍盛の云と
初八寺ハ鴨川東五條より

七 日 新能 南都興福寺南大門は五
四座の内二座休服感

うらまをほくび十三日よであ
に入りてつとむ△之能くして

能 地うたひの能きさるが 泊徳
余は若の能のあり通し 其角

狂 春日の若の能の名よりあ
どふひの神もいでうらうや 貞折

春日若宮能 九日ふか南
宮のまへ

勤 十日も洞門廿日 八 今日白雲
より千言進門能と勤 日とぬくべし

占風 東南の風(水) 祇園
西北の風ハ早と

八講 八講とは法花八の巻の大
意と論じると今ハ終ら

九 日 遺教經會 秋の区戒の
徑に系十本

釈迦堂大報恩ちス八条大
ちりて終らる十五日まで有

是と△誦讀會と云
能多のうり千かれ松や洞流舎通理

泉涌寺舍利開帳 十五日

祢 孫 貴船五穀祭

十 日 成 京 北山鹿苑寺祭。同
天神祭社人射あり

十一 日 列見 六位以下の
有とのと撰びて式部

兵部 二都よりほれ出ると上
はる政官にせよとせと量

空宿候をて入るると上つと下
はめ冠をかごしの死あり

俳列 名茶石引神を鳥帽
詞百首の巻がこれ神中と云きかたは

十日 百花朝 は日とかくいり

台候 十二日 天氣快晴

の實より一夜雨ふれありし

南都二月堂水馬大續松

二月堂ハ羅素院云天平勝宝

四年沖門実忠建之に因伽

井有是と信に若按の井と云は旨

は井のあを取て修法あり

並麻ぞとむ都の

南大は會 丁史 日四

十日 花朝 百花生日とも云

占候 は日と初農の日ハ晴

蝶會 唐に花朝をもつて蝶

と撰會となす

替市 は日ハこの及果うと

涅槃會 涅槃像三月ハ

は日釈迦入滅の日とす

是ハ月ハにやまありあり

破教論に南の勝王ハ十二年

二月十八日佛涅槃すと記す

周の二月今の十二月

改がこしハ釈迦如來ハ八

十日 百花朝 は日とかくいり

台候 十二日 天氣快晴

の實より一夜雨ふれありし

南都二月堂水馬大續松

二月堂ハ羅素院云天平勝宝

四年沖門実忠建之に因伽

井有是と信に若按の井と云は旨

は井のあを取て修法あり

並麻ぞとむ都の

南大は會 丁史 日四

十日 花朝 百花生日とも云

占候 は日と初農の日ハ晴

蝶會 唐に花朝をもつて蝶

と撰會となす

替市 は日ハこの及果うと

涅槃會 涅槃像三月ハ

は日釈迦入滅の日とす

是ハ月ハにやまありあり

破教論に南の勝王ハ十二年

二月十八日佛涅槃すと記す

周の二月今の十二月

改がこしハ釈迦如來ハ八

光依

後接送

伊勢籍

あつれやとよみまふまふとひん

① 陸の香。こが世持。ちち。鳥の林

② 俳。死。まきて。其。花。の。時。考

③ 俗。堂。の。賦。と。これ。れ。ん。像。其。用

不。く。け。い。の。花。月。夜。は。日

い。ろ。く。に。鶴。鶴。ら。ん。ね。ん。の。日。揚。降

④ 狂。佛。さ。し。た。は。遠。途。の。老。な。れ。や

れ。く。人。像。さ。か。け。た。か。け。こ。志。相

⑤ 雪。果。仲。ま。の。節。は。こ。け。し。の。こ

⑥ 嵯。峨。△。柱。礎。松。今。夜。流。系。ち。る

松。の。踊。躍。は。是。釈。迦。華。り

た。る。遠。を。な。り。繼。り。の。日

⑦ 能。松。の。烟。ま。け。そ。遠。途。の。花。射。流

山。崎。寶。寺。観。音。系。行。基。弘

法。え。三。の。像。用。帳

大。坂。天。ま。ち。常。系。日。林。く。ん。の

舍。武。△。常。系。舍。と。り。入

南。都。真。福。寺。△。常。系。舍。あり

金。園。の。子。れ。は。人。像。と。用

常。系。と。は。ね。豊。前。△。山。系

は。ん。と。い。ふ。日。旧。名。ハ。日

子。山。か。り。老。の。餘。花。前。火。十

日。小。花。く。そ。と。い。ふ。て。も。ら。の。ら。い

こ。れ。と。あ。る。花。屑。と。い。は。れ。の。屑。と。い。ふ

⑧ 積。塔。光。孝。天。皇。の。沖。子

雨。衣。の。皇。子。ハ。三。目。人

と。あ。い。ま。さ。と。い。ひ。一。か。七。日。を

雨。衣。の。皇。子。の。御。忌。日。日。換。換

以。下。の。丹。波。系。系。金。後。の。小。路。信

衆。菴。に。住。り。換。塔。金。と。い。ふ

京。奉。満。寺。日。蓮。開。帳。あり

系。極。通。轉。馬。口

の。南。に。あり。延。沙。像

の。こ。の。妙。著。圓。集。在。八。十。日。就。成。八。日

寺。觀。音。會。式。北。六。里。の

に。あり。大。然。山。と。呼。ぶ。寸。白。川。法

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

三月 四日
都なりけ日風はげしき世
に大慈山のおもきなりこなり

十九日 貝寄
天王寺聖王堂舎
の曼殊沙華より

解る貝成位吉のころりりり
おくは日右貝とよはの浦ひらり

ハタキトよりききこころお
は日の月と貝寄内よりなり

哥 續後撰 天教 前大政大臣
今こころにたもたへ玉こなりまん

貝寄や井に青ひませぬ事那
縁竹のちの人こころれ貝

観音誕辰 日と祝の
日とす今十八日

廿一日 浅間祭
信州浅
間嶽六

今二月廿一日八月八日に山
吹とひられた日とすなりりり

○説ふ二月廿日駿州善徳郡浅間の社重
重の祭なり長と△浅間内よりなり

齋菜あり法華に巻と巻う
能合らじゆ乃々のみ烟 乙由

廿一日 普賢菩薩
新き法ハ
お妙堂を

廿二日 大坂
天王の聖堂の燈
人形ありと子堂と

聖堂院と云廿二日さ子の燈
圓華代六時堂なりと一舎村

二舎村その外傍流を流すあり
堂なるの善堂にありおあり

鈴よりおにへりて流る是に
の糸かく行りりり本天下に

教は此寺年中の法舎は
中よりけ日儀第一とすあり

花筒を二條屋の門隅に
たつる廿一日試采あり

哥 源氏紅糸架
かり人の絶つるこころを

五石よけけてありれとひまを
非 厚を金銀の徳とすなり

如果
水

三十一日

狂 我々の風しめぬぞ御ま令毛臨
天まの業致すと 東よ
何となく面ふそらにさこのまに
食ふ系并勉土退屋

太秦廣隆寺 今武吉ふ堂
元無殿中像

京 後宮御院中加藤松
の下衣にこそとほこむ市

西蓮の書いけり 日 近江比良
六海

白髪にれば桓武天皇十
又奉に終るは日必とほあくあり

秘の徳末とかくきんどうる
非 後よぬ八幡の月や帯霞

五 京 小野天孫御
天原車中少社社と建

供これと△茶椀の市供と云日
右釋院に八講あり公奉根源

日二月廿六日天降大自生天

神のかとあぐらひし市日
右の岩ありてある院天仁

二年より右釋院にて八幡を
菅家の岩ありてはもとけり

云く本朝又釋大は匡衡曰天
道自在天神へあるひ天トに

陰樹一人と補導し天上
月日として美良と忍味し

執中文道の大徳月日の執
るも云つ 梵竹菴櫻宮のこら

元叡山住心院の徳心敬信
都は聖堂に於て遊をと治

或時 人とあつてあつた
云ふに引いらの欄のならふ

あつらんと併られなまの天神
感ありてよふ松をふの天事と

水の巻川浪のを二巻と掛け
たまふとるんそれつる庵

中又傍坊のやしろ成た
てけふの空といつり

或曰是時を以て信じてくす

非疎かねて素持とゆふ所保水有

河内 △通ぬる所 △通ぬる所

開帳有志貴教士昨村於に土

作ちこの入代く九條位持より

推た帝の教院聖座を子の御禮

たり天神の所社あり天馬元氣

天神と云はれし者あり

三百六十八日 六廿 日 八廿 日

和の節 △陽の節 △かん

トて天馬元氣

月令 三月五日

彼者 三月五日

秋二なり七日のるひうん

のに日とを併成号て中目とい

ふ時正し云諸位等後法徳し

て仏に供すると彼者等と云これら

吾友のひとに死すあまのひと

さにて比して比るとも云つ

哥海ふ入る新波の浦の夕日アそ
西ふさうなるまうせらま ぬ衣

哥西はりまよひさうらむは終て
南無阿彌仏のまゝ身をよ 一遍

詞様。紅雲。積まれ。入日。光る。
能々たちけあらし守徳が支考

さうさういそいそこのひんか
る秋風のまもらやいんま朝更

かのかきうたもまうぬきま
林道春野 進にいく或後

友の説小松樹を法蓮の化を
るてお率天の御は冥所

花ありそとに樹あり二月に
花ひくく七日七夜に

林天帝教の教を奉りて七月
の間に世の善人悪人の名を

記す生死彼者涅槃本彼者
友曰直取七日修善業

これ春秋七日の事なりと云ふは
ともいふ事なりと云ふはぬらぬら
石の録は彼岸日本の風俗
ありと云ふは歳時記の出る

茶の子 畿内の流俗あり七日
の間に亡人の日ありこれ
野菜の食類を知音のいふあり
能彼存念の茶は清くは摩訶

我等亡母為彼岸中
先慈諱晨偶中彼岸
月以因之摘菜蔬供
會預設蔬齋伏乞王

靈あいに付述而傍説
趾臨澈廬為修其冥
徑馳聞致度以山跡
福則存没均感賤价

九市若芳心担加奉納
謹言 奉賣

尺牘 書替 上中下
至趾 上義 獅座 賤价 上小伴奉告
交座下 飛錫 奉賣 銀鹿以報

彼岸 天王寺 彼者七日の
出で修りす男女老若中
中し婦人の衣類とかがり拭一

又競ひ出でまはせたりひさす
みかたの山良をいひし
排障も神ぬぎかけて彼岸死考
彼岸といはば清く春む日と瀧山

狂内んひひくん信のも女もあて
此の世後をやらるる一
同誦念佛 天王寺念仏堂
おて法あり

天子の名号として廿八菩薩
の画像をかいて後いす平野大

念仏寺よりお来る又西門を極東の東門にあらざる者より

其下にあつたり西海の八日と観音弘法大伴もは西門

よて目想観と修したまひいまひがん中日の形もはは

入石をおがまうんがためし俳むるよりまびぐのきふ節

京 御影堂△時宗彌念佛又條指西にあり毎年

春秋二季の彼者踊躍念佛あり中世に東尼と携へたに

麻と制す御影堂と称するち号成社長光寺と云ひて

さらば仁恩と解して余念なくれどりよはるるのそ

法苑経ふけ又あり

哥 一遍上人
そねいん子ねどくおんまの法の乃よいをたごりぞ

狂 世いこれてま法の為おとえてりへ御影堂踊念佛 声可

社日 立春より五月の戌の日と春社と云ふにまは

土の神と云ふく土ハ万物とやしなひ五穀と生す春の農事の

よからんるの秋の秋ハ其夏徳と報るる意なり燕の春社

日にあり秋の社日と云ふ俳うあ本にまを教よ慈め斜水

社日 左傳曰共五氏子勾龍と云遠遊と

好舟車のいりる足の達とらふ源りえずとつへは能水土と

平ぐ故し祀す社と寸勾龍と風俗通云脩とら

方壇 壇と築きて土地の靈に祀る豊饒といひ

陳平分肉 前漢陳平里中の社の宰とする肉と

分事甚ひとし父老曰善哉陳
孺子之宰たるや陳平曰嗟乎我
と天下の宰ならしめばまこと
肉れごとし云々

治聾酒 社日よのび酒と云
石林詩話よき

社日よ酒とのらば聾と治と
こつてならりたる故なり

詩 兵部李濤

社公今日没心情
為之治聾酒一視

社美 唐吳越の俗必美
と以て祀るところなり

社翁雨 社翁はるる水と食せず
故に社日雨雨といふ

詩 社翁雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風

社日ノ雨ハ草木ノタラニハ父母ノゴトニカ
モ年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言詞

今朝社日停針線起向朱

櫻樹下行 社日ハ女ハ皆ハリシトラ
ヤ息トヤル花ニ行遊

男女嫁娶 周禮媒氏の注
陰陽交て以て昏

礼とます天の時を順ふこと
されば月婚嫁よよろし

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる紙をうて遊ぶ

東央宮ノ遠近ヲ量

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信
紙鳶ヲツクリテ遠近ヲハカリシナリ

得子 二月乙酉の日に午の時
夫ぬわねの心を

初雷 仲春に初
めて

けいより 虫動くもへん 虫出し
とく入雷のまの 委の博物志

古今集

天のふらふらとあふらふらなるか
ふりの中をさるもの

詞 ころく。ころく。ひくく

俳 かねがいに隣どしをの折は左迄
雷や他のまのまのの 嵐雪

雷の始るのやまの父母

狂 おとろふるよりの入るもあそ
ふらふらなるものころく 遊山

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株

光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光

一鄉孝子為傷心 聽春雷

詩 雷五言對句 詩五言對句

山鳴喬木側 滂沱無所避

水激蟄龍飛 霹靂不堪看

雷 雷ハ二月ヨリ
百八十日ノ間

人君之象

ニ地ヲイヅル 萬物モテタ
地ヲイヅル 八月ヨリ 後百八十

日ノ間地ニ入ル 万物モニタ地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ 利ヲ興ス 人君象

雷槌 陳ノ時燕紹ト云人雷槌重井九介十九モノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷襖ヲ得タリ斧ニ似テ

孔ナシ○時珍曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云ク

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトニテ異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロ

正ル一諸書ニニエタリ

雷除ノ守 越ノ白山鶴中ノ守有其ノちと畫ヲ持すとバ雷

雞とのがるくたに果あり



候霜 霜の日より百八十日

之又秋序はじめてゆより来る日ハ十八日のおよりおふるなり

氷口祭 掃ハカにあらざれば

代水と氷ハカとを交るを其らう

日と徑て苗をハカ一をふるを其

の冷暖カをいよりて氷口とあ

らくるめとどころふ考へたりま

はるハハ十割に幣さしは

さとしてあらはよさすなり

○夫木 師光

ますしとらうまのうふいく

志とて水にまらうふどハハまらう

○あはのふとふいぐーま芭蕉

田畑野山を焼 芝焼。旱を

ハ地と焼て移るふあり是を

火業といハ和名やんごこといふ

哥 夫木 苗代菜黄

小山田の苗代々とのまゝにて
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

非 菜黄のまゝも秋さきなり 苗代田天川

種浸 菜とるゆるに先被居の
おに種とるにひきす被

非 後よあし出し種と下す
詞 なたひ △種を 種とるにロー
なかり

哥 千首 為尹

種井 種とる井と名づく
新選六帖 為家

及そのあせのかういひをきいて
たる井のはねかやまはま

非 かつら木の本は種は種井かき書

湯種 農人種とぬる湯は使
てすけばよくせす

又使たる種と火のかきとらと
あきりるもよくせす

種蒔 △種じ △種下

哥 夫木 國信

苗のまゝ苗代々をあせおきて
入る種井に種下ししる

非 種下し依りて小柄か其角

藍麻蒔 麻あひあき 孫つれて麻蒔
畝の小名か 芭蕉

蒔 異名 紫塵 初けてまふる
と付これと合ふ小兜の蒔

の曲らやうにひきあはるは
して紫とひきく付ハ鳳尾のじ

高三尺ふもまゝ其根は紫を
皮肉括くらして再三ひ

剥衣法とれハ葛粉とちらぐ
用ゆるなり

詞 △まゝひかきまゝに ねれはち

哥 新拾遺 くらひか 和泉

くらの日ハまゝか心のかこゝし
つけハまゝとんおさるゝま

哥 万葉

岩そくぐ垂あの上はむらひの
もえ出るまよかりにけり

哥 臣挽

ふ里のちのささびとれて
かぞへまゝい又年もほそかり

詞 かきこび。こがさび。こわい
りそびる。小粒。かきこび。のり

連 びつさねのちとすまの蔵が絶
さつらびもあまのねうらなを仍

俳 びのやまや折の先 蓮
こまびのらふ折袖の内

狂 くりあげささるさすいさ
まごころすすまびめ人遊山

詩 蕨薇詞 杜子美

雨足空山 蕨萌春深 真蘆

真蘆紫金莖 兩ハフレドモ山ニ未ダワ
モ、エイテ子庄春ノカク

ナリテニヨキトハル
紫金莖ハツビノ名也 伯夷不食

周家粟米 必先知此味清

昔自製カ着陽山ニカクレテワラヒヲ
喰ノメタルユニ今々ノ味ヲシルソレマ

テハシラナダテ
アラフトナリ

詩 蕨七字對句

詩礎

承露未開 仙女掌 元無骨

擎天先出 小兒拳 已作拳

口中藥 けいびりやまここがあらま

を合せて 翁よけくを合てぬ
冥癩之藥 さらびの粉を合てぬ

蒲公 異 僕公墨 蒲公丁 黄花
名 地丁 白鼓釘 金簪

和名 ふぢな つぶささともいふたん
不ふとと云ふり出るるるべし

哥 死さるも人やいさめの後ふみ草
若かり世のまをされん

鹿林 **淡路宮** 日本紀及正天皇
淡路宮ニ生シタマフ

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ
時タチヒノ花オチテ井ノ中ニア

リ故ニ御名ヲ多遲比瑞
齒別天皇ト申シ奉ル

狂日本ハ扶スハクヒヨク
かたけてももる所の虎ウマ 桃綺

葦 (異名) 長生葦。翠髪
(和名) 古美良。美良。出ス

中心壁と抽きて白花をひらく
生のものとしんころりし

取ひひの入ると出す 生まらぬ
けと能ふ合せ取へ入まてむしの

ハニクムノ心ニ香ノのびる
野蒜 皆食之

蒜 (異名) 美菜。卵蒜。(和名)
比流。蒜。小ハニホヒナリ

真ユエ名ツク 野蒜 皆食之

日本紀景行天
皇第ニ御子日

本武尊東夷征伐シ玉ヒ山海ヲヘ
テ信濃ノ山ニ入既ニ峯ニヲヨシテ大

ニ飢ツカレタヒシ故ニ山中ニ御食
ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ玉

ノ前ニ立テリ王アヤシメテ一ツノ
蒜ヲ鹿ニ彈カケレバ眼ニ中ツテ

死ニケリコ、ニ於テ勿心道ヲウシ
ナヒ出取ヲシラス時ニ白狗来テ

王ヲ道ニキテ出ル
コトヲ得タニフ

源氏品定 源氏物語のきにあ
るむすめにちりて

たまへといふをいかにのころるまひ
るこたをいひるますくせといへり

あや **薙露之歌** 齊の田橋カ
まき 門人歌ヲツ

ク
リ
薤
上
露
何
晞
明
朝
不
復
落
コ
レ
薤
露
巷
里
ノ
ウ
タ
ト
イ
ヒ
テ
コ
ノ
人
ノ
葬
リ
ヲ
オ
ク
ル
時
ニ
ウ
タ
フ
タ
リ
ニ
ナ
リ

夜雨剪

郭林宗友人ヲ見
テ夜雨ライトハス

非ヲ剪テ炊餅ラツクル今
洛人コレニナラフ杜甫詩ニ

詩 夜雨剪春韭

非ヤ心ヤウ裁ウラ出タル地ハ野坡
韭摘ニ隱居の公匡コウコウノ
地ハルヤウ志本の地ニ未熟の韭菜

狂徒ニヒテ於ておもひこころの
悔ミにこころ白入なり平田

妙藥

瘡藥 じんく 三胡樹
スベニニ 三分 右掲合せて

一丸とくまの肘の内らふく
ア指とくべノ男ハ左ノ女ハ右の
疔ノ藥 地ハルヤウ志ヤク抄テの
肉トてより付てより

薤

薤 せん せん せん せん
大ニハク 皮ニシテ 薤ノ

不とりあつさ土一塊に十を
ませ汲立のあらにらくの汁をう
は中へそくぐべしぬきり

臍藥

地ハルの裏子で熱の白

みをかき 搗りて用也

又薤蒜

とくひて口中のふはひ

を去るうはははかよき酸をこ
かしてはさそくをこし



水葱摘

一名 薤菜

○三方國會にもあひひ夏ニ
あり 紫を色 但し 夏ニ ころし
花あり。波高。は橋板。水葱
こまは名 薤菜なり

哥 万葉

大伴宿禰

まを殿とての里のうへこなる
苗有らふし ぬきり ぬきり

俳 水葱摘となす性もよき初月

薺花 （異名）護生草 三線
こり入花白 小鬼は

草の莖とくにうらふに引張
ひけば三味線の音に花の根のじ

◎ 家集 好忠

庭の面うながるゝの花のちねへと
まやそ清ぬちちとそふり入

◎ 狂ひくらのこ味せん若のあこころ

なうなとこをにけはぬらら鯛一

菜花 菜はらふはかたふ又菜
たね◎ 非 くのちや威し 連二
やうちのな

大根花 （非）大根の花を 一畝方
味とみ付たり

鬘草 （非）かぐさ根の下
まじり若をこれ 舊皇

末黒之薄 袖中ゆに竹の
根とこをいへス

一後よとくこのまふのまのまこ
とらへしつり

◎ 夫木

下のそのすうろをらうらふまふこよ
やけのくすいれ若のこらうらへ

◎ 非 草のあやましくはれとれ和 秘書

草芳 萌ゆる若のあはばく
あうらとらうらへ

◎ 非 芳しやいふまの心のを解きて才磨

◎ 詩 芳艸之詞 文選 教草

芳草生兮萋萋 王孫遊兮不歸

◎ 詩 芳草七字對句 詩礎

情如芳草連天碧 穿巷陌

身似楊花盡日狂 如有情

草若葉 若草といひて

正月の季あり少し長ト

たるよの△菊の若葉△鶯の

ワが葉△萩れまら葉

◎ 非 若の葉少むるも大はを 暮

冥帳の何れかみしよ柳の葉 支方
雲ふ遠坂のやんさより葉をて由

萩之焼原 萩のどろろも
つゝ萩の生ひ

初々黒き芽あり是と焼や
つゝ其外説いらくあり

いまどきけぬびらりあふ
爰ふつゝおきいよ所々力

燃谷と心得てより一ゆき
新千裁 寂蓮

まゐるこそみし冊子のちふ
つゝつゝのえるをそのやけ

非焼くももはるゝ萩のまき
雷安 東鑑

芳角 芳の推△角祖若
草 草

我を耳とく何あつゝ
わいゝつゝせつゝあつゝ

萬葉集 石川女昂
絶巴

能流依あつゝこもあつゝ
角ける遊のにけりあつゝ

狂かさるかてあつゝこもあつゝ
りこもあつゝたつゝあつゝ

詩 七字對句 野相公

紫塵嫩 蔵人 奉
手

碧玉 寒 蘆 錐 脱 囊

艾摘 通俗達の字を用ひ
たり新法してもさる

家集 好忠

あつゝ小田のこもあつゝ
今ハまゝいこもあつゝ

夫木 俊成

百人首 實方

かろくゝいえやハ仔細のじ
はしとあつゝあつゝあつゝ

うりかゝる指のちの熟あけぬ
くねる井うす死花ねらうくね

◎ 後拾遺 元補
梅の花香はらうに白くもひと

うさくこくこくこくこくこく

◎ 家集 道達院
梅の花散るはる月影うさく

か面のちうは枝にをけけき

◎ 類頌 紅梅連 雅世
まふうさくおの梅の花のねら

梅の花散るはる月影うさく

◎ 朱の廣。紅のち。うさくこく

○ 林の本まに梅うさく由うさく

うさく。おのうさく。おのうさく

◎ 紅梅ハ巨燈の火をききうさく

紅梅に思ひてねらうさく

◎ 狂 美とてあひうさくのうさく

花まらうさくうさく

◎ 紅梅詞 貞柳

韓駒

路入宮家百歩香隔簾秋

識漢官粧 三子ハタノヨキ

ガアリテ其ハヨツホハニスラ

テ、見一ナルガ漢宮ノヤウナル

直疑夢到昭陽殿一簇輕

紅洗淡黃 昭陽ハ前漢成帝ト

殿ナリ紅バイヲ見レハソノ殿

ハユメノウチニキタルヤウナリ

ヨリ美人ナドロトムラガリニ

◎ 春半花終衆多應不奈

寒 春ハナカハバシレ

識渾作杏花香 城コクノ人ハサ

今コロ花ノサカントハエ

イラミテモ梅トハ思ハス

◎ 紅梅五字對句

照溪如濯錦 嫩蕊融紅雪

隔嶺似流霞 繁葩剪絳綃

金ノニナリナカスニナラ

トホクニナリナカスニナラ

詩紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片

香不盡

寒日晴烘蜀錦机

酒初薰

壁上詩

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ開ク時一婦高キ髻ニ大ナル袖シテ高ラニ倚リテ

モテアソヒ詩壁上二題ス南枝向暖北枝寒一種春

風有兩般憑杖高樓莫改留大家留取倚闌看

告紅梅ノ盛文

尺牘

庭前庭

蜀錦集目

邀士

人貴云云三人お招き

足下典二三條

真

神像奉掛速款お借中

聖像 共暢觴詠之懷

持帚俟

尺牘 去啓上中下と記

満開 芳發。芳妍。縹約。明

媚。馥郁。邀士 吟客。佳客。

逸人 足下典二三條 上 公典

遊 中 君且負條 暢觴詠之懷

上 將驂吟筵 中 催寬興之會

欲試賞遊

梅下續詠之催趣喜々雀

子知ひお出座席て仕
躍 豈不登臨

如例又屋後中
文楸 附馳使

尺牘 上中下 去務と記

催趣 促遊。展懐。遊宴

喜々雀躍 快衆心。想甚依然

上 称快万衆 中 何喜如之 豈不

登臨 上 步而捧誦 中 詰鏗金

吉 上 入廣夏受奇蹟 中 馳

驚而容吟慰 中 参扣且唱愛

馳使 介子。僕士 上 貴奚。

遽使 中 崑侷。走力。銀鹿

狂 新波はの梅をアアアアとか
けらり八重ら七重を腰にひらく

八重梅 花の八重をアアアアとか
けらり八重ら七重を腰にひらく

俳 八重梅や尾の 座論梅

花浅紅より葉多く実一枝

ありあり人のたよりを座と

ありありふかたし人きり

越中梅 花大ふりて白く淡
紅と帯を後梅に似る

黄梅 迎春花とつ梅に似て
梅より高二三尺あり

正月に開く故に迎春花といふ
俳 髪も美に若ます香は梅香貴

初櫻。初花 春の二重
花は初花

早く咲く梅の懸名も初
花は初花

三月草木の部ふく
哥 万葉 人丸

佐のほのほにアアア初花の
まじりてはアアア初花の

哥 續後 伏見院

暖とむるか山の花のちいささを
引遠にうつくる歳のちいささを

哥 新古今 家内

ちりんらんらん志のへしおれあ
たつたのふれおどろく花

待花 花のちいささをいへば
はや死も嘆ぬとあはれ

哥 家集 頓阿

とくまへて花の本の芽は春西に
花はまなまよふとさくらつら

哥 菊拾遺 俊成

山桜咲やらぬあはれとくま
ちこそそをたふるまはれおの月

俳 五やうの花初おそわびは春
狂 ちうまうとて待とまはれ

本の下にたれ 糸櫻 志たり
まうして鳥有

いひ無糸とていついお
こまひとくはさくかたり

哥 あすもこんきう桜の枝細と
柳の糸よむすはれらう俊頼

俳 百すらしも春のたあ糸桜野坡
糸桜もも指よとぬは京甫

凡 吹い屋も掃らういとさう北枝
狂 たくちの庭に咲なる糸さう

むとんだ海のうらとせうらん貞大
アとのやとやもんだのやうまれと

今もいひとく 姥櫻 花短
いと桜の本端

密てまはに花の老の蕾は花は
俳 花散といとれはつ焼桜 立甫

狂 蕾はととくは桜とつらさうの
花うさくことこれはいお 左柳

児櫻 花白も花は
抱てあうあはれは

俳 花人のえるのね 一重桜 於て
せんはとくは鯨花

哥 花はとくはあはれは花の桜は
たぐひとくはあはれは

能はて出る一をといふ 彼岸櫻

一を櫻と云ふ 千丈 櫻の傍ろおく咲くは十日

あり春分の日ころは花櫻の 那櫻なる 那名をいへば 事伴

能は仏のうそを記被る櫻か哉目 狂 羊すもたまはくはつたてとやあ

すら金なるやんはひん櫻ハ貞太 熊谷櫻

の公で名付られたる櫻 種 植

草本の種よりいへば 接穂

異名 接頭。小篋子。 果よりいへば枝とつぐこ二より

ちる君枝の肥盛るる陽にのみ たることとるはくべし 接目ある

らに暖うす皮と骨とをいひち がつらやうにすぐし 春分と前

とするゆちのりかじと 葉よ

揚樹とはげば酸をいへば 櫻

に梅とほげば金椎と云ふ 小椎をほげば李椎と云ふ

哥 新撰の情 光俊

アもいふゆいと本の花は果 てくハを咲くははに櫻と云

能 小刀のそれららと云は接樹の蓮 月影の影とはささなる櫻本は由水

揚と植のそおのそや花をり金雨 桐芝におくのとく接木が 堂

茄子栽秧 ますし植時 根にあきて 泥をいへば けい

もろこしふハ一尺 西瓜撒

肥地と坑と不つと坑とに 肥とまくと苗出て後根の下

土と壅く盆のごとくして 多く飯をいへすけは丸

多く飯をいへすけは丸

種蓮 ころねと葉のせいで
ろろろひひる 泥を包み

栽へし挿 挿壓 本の下枝の土
油と混ぜ

分きう目を入れたら泥土と下を
其枝の上にも本の方まかに土を

分本の方まかに土をうけす糞
あとで土の上をうけし次の

本木の方を切りて九月下旬は枝
し栽し五月梅雨の時分根を生

たるものと知るべし 今月木犀
躑躅等とよせほぎはさるには

殖培 根本の土をやわげ糞
と混ぜ 石榴 梨 海棠

糞はほじり糞の徳へころし
旧糞より或ひは馬糞を用し

挿木 此法の黄土と日に細
末しとゆと等分に篩

よくまじへ六七寸はうり地に死
はきかこめて枝を馬の耳ほどく

にそぎ返し大きくころり列の
木の枝を先穴とあけ其穴に

そぎたる枝を五寸ほどはさみぬ
水とそと陰地より或は上よ

ふふひをこまぐし月を思かう枝
に至つて根を生したる枝を

栽のべし 今月日本には
檜 栢 樅 丹 栢 羅 漢 松 海 紅 海

棠 山茶花 石榴 山 礬
薔 薇 黄 梅 櫻 等

抹薬種

根 沈在中か葉はよく
法草薬を採るゝまぐ二

月八月と用のころりからす
二月の叶の芽は八月の苗へ

たうます放よころり葉泥のこ
ろり葉縁のあし宿根をあ

ハ別苗生えまこころりころり
時取べし根たうていまこころり

修樹 菓樹の小枝枝を切ら
実をひきとて大にこころり

生類 けがらひ二月二月
の生類をさのこ

果鳥 かなし鳥かなし鳥
けがらひ鳥かなし鳥

哥 夫木 光俊
のこころの家のおれこころ
ふらふらとととと花あふこころ

哥 万葉
のこころの家のおれこころ
ふらふらとととと花あふこころ

雞 負老や二匹の不元めり方
のこころの家のおれこころ
ふらふらとととと花あふこころ

雞 異名山梁野雞 蘇漢
の高祖の夫人呂大后の障と

雞 和名木々須 昔は名ハ雉子魚ハ
鯉と名上とすのほまきまをハ

雞 雉子たおさきりのこころ
のこころの家のおれこころ
ふらふらとととと花あふこころ

雞 其外かうれとこいせおれと
のこころの家のおれこころ
ふらふらとととと花あふこころ

詩 雉七字對句 詩礎
田夫就餉還依草 共啼花
野雉驚飛不過林 起平原

詞 雉之詞
白雉振朝飛 吉来表太平
朝廷

若鷄鳴 疑鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現スカ
ト疑ヒ声ノ弁ハヤカナルハ鷄鳴ニ

似 童子懐仁至中 即作賦成
昔雉

車 冀君看飲歌 介獨含情
求食スル体ヲ見ヨスヘテ

諸鳥ニスケレテニユルナリ
雉之 春秋ノ時衛公
ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

雉之 春秋ノ時衛公
ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

雉之 春秋ノ時衛公
ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

雉之 春秋ノ時衛公
ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

カ遂ニ帰ラスミテ死スツノ
傳母コレヲ悲ミテ女ノ常ニ

ヒキシ琴ヲ塚ニモキユキ彈
ケルトキタチニ子塚ノウチ

ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ
見テ傳母イヨクカナシミテ

琴ヲ鼓テ雉操
飛操ト云衆ヲ作ル

捕 魯ノ恭王中年ノ令トナル其
所ニスキケル童子アリ雉ソノ

傍ニアレドモ捕ヘズソノ故ヲ問
ハ雉雛ヲツタレバコヒヲ捕ルニ

ノビスト答フ是恭王ノ政令ヲ邪
ナキニヨリテ虫境ヲ犯サズ鳥

獸ヨク化シテナレシタガヒ童子
コノ仁心アリコレ三異ナリト云リ

燕△同巢 和名豆波久良女
異名乙鳥

玄鳥コトナリ○鷲鳥鷲鷲コトナリ
鷲コトナリ鷲コトナリ鷲コトナリ鷲コトナリ

於波 後漢書云子孫を祀る於此
天女 人白無とんれハ貴女と生たて天女と号

○春 春ヲ秋去る其コトナリ秋コトナリ秋コトナリ

建久元年百首 定家

建久元年百首 定家

家集 頓阿

千首 師兼

毎日百首 為家

二月のやまのうらとありぬり

詞からびすびのほめと名 異名ナリ

翻る。たすあひて。あゝ葉はひ。

鳥のふる。かたしぬ。あし
 よはらるる。かこころ。かこころ。
 運ぶ。の。目。か。る。羽。の。巻。が。背。拍
 非。は。と。下。に。付。て。空。を。箱。過。運。二
 流。を。ふる。孤。燕。の。影。が。水
 空。を。ふる。と。ぬ。け。遠。の。影。の。向。隠
 山。の。傍。に。燕。を。入。目。其。角
 好。や。も。い。も。ま。ぬ。燕。を。去。来
 狂。を。里。に。分。て。う。づ。う。づ。の。づ。ら。の
 う。づ。う。づ。と。う。づ。と。や。あ。る。紫。笛
 だ。て。さ。も。様。を。い。も。を。づ。の。を
 は。を。う。づ。ら。と。い。う。づ。ら。の。舊。道

詩 燕之詞 白樂天
 羽族知机社日來翻身尋

主人樓臺 社日ニハキタルヒルガ
 へ。リ。ト。ニ。テ。兼。ツ。ク。 扱。雲。掠。兩。高
 ル。家。ヲ。タ。ツ。ヌ。ル。 還。下。度。柳。穿。花。去。又。來

其飛カケルイキヲヒハ雲ヲオカニ雨
 フククハリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

花露水一毛不染地風
 埃 其飛アツバサハ花ノツユヲハラヒ
 テ地ヲ吹ク風ハカスレトモスコミ
 ホコリモ 烏衣國裏風光好
 カマラヌ 養子成時使帶回 鳥衣國
 任山國ナリ其国カヨロキユヘニ子ヲ
 ヤシナヒエテハ又子ヲツテカヘルナリ

詩 燕五字對句 口上
 風簾雙過影 夢遶烏衣巷
 画棟並棲身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句 詩變
 羽翼不沾寒食雨 經春雨
 夢魂應遠落花泥 逐暮雲

燕 燕子國 唐王梅海過
 几三舟破板一枚二

二月 生類 三ノ四十

取ツキテツツ鳥ニ至リケル
人來テ玉樹ヲ見テ是我王
人ナリトテテテ宮室ニイザ
ナイムスメヲ以テ樹ニムラセ
ケル然ルニ其人ニナ黒キ物ヲ
着タリ樹ニスメニ其故ヲ問
テ是イカナル國ゾ答テイハ
久鳥衣國ナリ其後樹家ニ
歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク
ニツノ燕サヘツル樹コニオイテ
カノ止ニル所燕子
國ナルヲミレリ

石燕

山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テ
イケルカゴトシ雨ヤム時ハ还テ
石ト生之周
詩經天命玄
鳥而生商○高
辛氏ノ妃郊禱ニイノリ
テ燕ノ巢ヲヒロヒ食シテ
契トイフ子ヲ生リ
後ニ有商氏トナ

玉京紅縷

宋ノ女姚玉京
が家ニ燕巢ヲ

ツクル其子生育シテトモニ
去ラントスルトキ玉京ガ臂
ニ集テ別レヲツク玉京紅キ
糸ヲ燕ノ足ニ付オキタルハ
明年ニタ其糸ナカニ來
レリカクノゴトクスルコト六七
年ニシテ玉京死シタリ燕ハ
カナシク鳴ワタリ終ニ塚ニ至テ死

避戊巳日

サクホキヒラ
トス廣義見エ

負燕

元ノ元負三年
湯佐ガ家ニ巢ク或日

雄猫ニトラケル雌燕其雛ヲ哺
翼ナリテ歸ル其後毎年雌燕ヒ

トリクニ來リテ同巢ニアリケル
一六年見ル人感号負燕ト云ケル

妙藥

淋病藥
遠をこそ
あるよして合ふべし

已辭霜雪苦

玉塞情何極

寧羨稻梁肥

蕪葭夢亦稀

引鶴。引鴨

冬又復了月
く冬より春と

多くあつたり居る所と
る○相懸徑よく鶴の跡を
まゝの痕はたゞ七年に小返し
十六年に大返す百六十にして
髪止まらば千六百年して形定
る體業を尚ふ放る色白く
天の宮の白ぬい味あふ合はす
其隊長前に軒さ後後の指
経天壽影くくは是も根
長仙人の強讓と飛時一挙千里
百六十年来して雌雄相視て孕
千六百年よりいふとのとて
食さるるのまゝ 聖人位よ
あれは別つら鳳之ぬに翔る

哥 引鶴の姿に万代りるら
市代も毛尾の酒のほけき

詞 もろき。まゝは鶴。あまき。
身を井にすも。鶴の毛ころも。

子とあふ。おのつ。かきへの
いつぬき川。まかりすあふ

俳 引鶴やふ法の梅の二三篇文秀
引鶴よとらと氷も別る雪正

詩 引鶴之詞

寄跡含香舎淹情加樹林

ツルガレキノ官人ノ方ニヤシ
ナハレテヒサシク井ルハオノレガ

任ム樹林 長鳴如訴狎俗
ヨリモニサレ

到如今 鳴クハ何ヤラ誰テモス
ルヤウニニハテナレテ

今ニ 不滌風塵色常存霄
井ル

漢 其サニハ大空ニ井ルヤウ
カテコラ

會應王子晋接雨向嵩岑
カサエ

イツガハカチラス鶴スキノ子晋ヲノ
セテ高山ニユクテアフトナリ

鶴の 林浦龍鶴 林浦孤山隱
居ニテ常ニ

ニツノ鶴ヲヤシクフ 縦セハ飛出テ
雲ニ入テ多クニ久シウニテ又

籠ノ中ニカヘル 林浦小舟ヲウ
カメテ西湖ノ寺々ニアツテコト

常ナリ若其畱守中ニ客ノ
来ルコトアレハ林浦カ童子籠

ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ林
浦カアソブ所ニ来ル林浦コ

レヲ見テ 上揚州 小説ニ
家ニカエル 日人三人

アツニリ各其オモフトコロコ
イフ人ノイヘルニハ揚州ノ

刺史トナラニ人ノイヘルハ鶴
室多ホシキ一人ノイヘルハ鶴

ニノリテ天ニホラントイフ
其カタハラ二人アリテノハク

我ハ腰ニ十萬貫ヲ懸テ鶴
ニノリテ揚州ニ上ラン

ケム ツルト 神異録曰 玄宗
苑ニ獵ス鶴ヲ見

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西
南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ遊士ドモ一歳ノ間ニハ三
四度来テ遊ベリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来
テ彘子ニ謂テ曰我山中ニ行

テ矢ニアタレリトテ則其矢
ヲ壁ニカケテ後日此矢ノ主

来ラバカヘスベシト云テ帰ル
ハタシテ後日明皇蜀ニ幸

ニテカノ道觀ニアソビ其矢
ヲ見テ己ハ我沙苑ニ鶴ヲ射

時ノ矢ナリトテ此時徐佐ケ
イカ鶴ニ化シタルヲ知レリ

二客来弔 陶侃傳曰侃
母ノ憂ニアタルニ

ヲヨニテ墓ノ下ニ在リ勿心チ
二人ノ客アリテ来弔フ哭セズ

腎茶 崔世羽 氷砂糖 一斤 酒一升 炭火で煮せしめ少く煮れば好む

松雀鳥 菊いたくきこぬたのち 春松の葉を食む

哥 夫木 寂蓮

深山の香るる葉よりうれ茶を 新湯とつくりぬむじやうとて

非 松むじる智もちとせう天女貞室

孕鹿 九の月よりして一子を 生とすうの万葉の鹿

の子のひとりと松河のよめり

非 花つきの狷の後に孕鹿 白羽

鹿角落 角解つていふの鹿生て 三年して其角自落

非 豆弱のけららや麻の角 潘山

為すまふの後の産思 麻の角 未山

妙薬 産後目まの薬 麻の角と 死て灰と産後を利由

はさかさの茶 麻の角 茶枯し 花子

と茶をに枯しひわりかけてし

妙術 麻の角とあつつかよすこい 鯨骨を加えて煮てぬす

蜂 蜂巣 蜜ハ夏巢の内よ たらして冬食ふ

のまより出て花の蜜ととり蜜に 醗して煮くこ。蜜は熱飛ぶしとす

哥 定家

うきて世をさるる色の刺に竹蜂の とすくまなれぬいとくあう

非 初学は院はあやまる年賀 鶯

蜂の巢や下たれづもまを頼 瓢三

素蓋鳥のさくれ人蜂の奴が 志者

狂魚つらうめもも似る蜂の羽を

たぐさすめふらりとそり入 加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為

酒花為糧 蜜ハキハ人間ノ米ハク

ケトシ花 作蜜不忙採花忙

蜜成猶帶百花香 蜜トスルニヤスシ
花ヲトルハイツカシ

廿二蜜トナリノ三百花ノニホヒカアルノ

故 蜜糧 葛仙翁客上對食ス客奇 カクセンワカクカクカクカクカクキ
カクカクカクカクカクカクカクカクカク

吐クミナ蜂 トクミナ 蜂飼大臣 ハチカセノオトコ

十訓抄京極大政大臣宗輔山 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

蜂ヲ何丸ト名ツケ飼玉ヲ故カク カクカクカクカクカクカクカクカクカク

号 密中蜂 神瓊禪師蜂念紙二 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

アタリテ出ニトニテ出ルコトアタ カクカクカクカクカクカクカクカクカク

ハサルヲ見テ世界カクノコトクヒ カクカクカクカクカクカクカクカクカク

ロシトイ下モ出ルアタハスト云 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

妙藥 妙薬 松小一ツツの油付 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

女作の系とひ一東にさうり三本よ カクカクカクカクカクカクカクカクカク

あ三升入て二升に返用 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

妙術 妙術 松小一ツツの油付 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

狂 狂 白くひうたんと同へハ枕目 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

蝶 蝶 採花使。粉拍。蛺蝶 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

右 右 采花使。粉拍。蛺蝶 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

古今 古今 おのゑ カクカクカクカクカクカクカクカクカク

夫木 夫木 定家 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

房 房 子あるころな花ねは自由 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

新 新 房の梅の花のころて カクカクカクカクカクカクカクカクカク

詞 詞 さいふ。あつらふ。まとも カクカクカクカクカクカクカクカクカク

懐 懐 花よぬる。花くはつら。花 カクカクカクカクカクカクカクカクカク

て て のふれて。てのいろ カクカクカクカクカクカクカクカクカク

てゝ人のころ。おねらふはし
。香とぬとび。喧をやぶる

連 ころまのりよけはるる蝶宗

俳 名をみ町中たるる蝶又其角

俳 ころろのまのぬめり小蝶又曾良

俳 鐘達を多處お蝶のたつ山里

俳 空竹有の裾る相蝶又川治川

狂 蝶くの神とてふとばかれを

人もかこぬくわさるる貞柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲 両翅暈金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルヤウナ亦

フタツクツハサハイロクノ色ノダクリクア

ルナ 初来花争妍 忽去鬼

無跡 初アキタルトキハ花モソノ色

ハ夢ノアトモノユサヌカホ

ヨキコトハハタラトナルゾ

○香鬢粉翅暖争飛 品物

多情總属伊 伊ヒケツハサヲイロ

トリアタハカナ

空ニトビカハス春ノケシキハ何モカモ

ミナコノ蝶ニケニキヲウハワレタリノ

上國万家風月夕樓臺取

次宿花枝 都ナトノ家多キト

トナレハワカヲモフニニヨロシ

キカタノハナノエダナトニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

繚繞戀花衢 輕伴落花飛

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 莊叟夢

力困慵飛過短牆 謝公名

蝶 嶺南異物志 人

蟹 肉片 海南三浮ニテ

蝶 三儿大サ蒲枕コトニ肉ヲカシテ

介ヲエタリ是ヲ噉ハキメテ肥美

庫中金銭 唐穆宗ノトキ 禁中ニ花開キ

ケハアル夜 蛺蝶 數万飛来テ 花間ニアツル宮中羅巾ヲ

以テ撲トモ得ラズ帝綱ヲ空 中ニハリテ數百ヲエタリ夜

アケテコレヲ見レハ庫中ノ キンギヨクセンナリ

長明寮心集ニイ ハクムカニ佐國

ト云モノ花ヲ愛シテ六十 年遂ニ飽カスイハク我生レ

カハルトモ花ヲ愛スルモノニ ナラントノ詩ヲツクリテ死ナリ

其後アル人ノユメニ蝶トナリテ 侍ルト見タルヨシカタリケレバ

其子花ヲ心ノヲヨフホドウエ テ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソバ

ギテ孝養ノ心ニソナヘタリト ソ孝心ノイタリカニスベキト

蝶タルヤカナラス 分チカタクアラシ

云く是ヲ物化ト云 莊周夢ニ胡 蝶トナルサメテ周セトモ蝶ノ

周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知 異名 石蜂 丁子蟹

蛙 一名科科 蛙の子 秋かけてゐる 蛙の音 色香く蛙

夫木 家房 こぼるる舟とひとびを地一と 堀の蛙をまきりなり

千五百番 家長 まきのふりの山田とまこえの 鴨のふーごま蛙かろくろり

新六帖 信實 まのつらねあこびと谷うけの 岩のうけにね蛙かろくろり

家集 兼盛

家集 兼盛

沢あり又蛙の多し老より
ふそくやうたんまわ小山回
詞すだく。法多。川池に沢回。

小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月
あ。心次の夜の響。おまきよ。
蛙とまのふれらむ。思ふ。うれま
かまはる。ふれらむ。あせむ。

我おと蛙鳴らん西の回 蓮二
園土も雨にたれて蛙も 草也
角はこ蛙鳴、はの甲は蛙 其角

狂歌のり左今まひてやよ蛙
よひのふらうらぬまきけは貞柳

蛙 龍王海ノ辺ニ
驚 女子雑説 蛙ニアフテ問

テ云 汝カ喜怒何如曰我喜ア
時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時
ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ
テシコレニ次クニ脹脹ヲモツ
テシ脹リスギルニイタリ
テノキヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬
十月国栖人国津物

ヲ献ス此クズ人常ニ山ノ葉ヲ
食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝
食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ
ラシ醋ヲ和テコレヲ食フ。唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊
人ノ耳ヲ聒スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトンドコ、ニ及
バストイヒケレハ晏慙テ退ク

晏ハ鼓吹ヲコノム人ニ○宋書ニ
蝦蟆ノ膾見ヘタリ○漢東方

朔カ傳ニモカハスヲ食フコト
見ヘタリ○淮南子ニ五月十五

日蝦蟆善ヲ作ルトアリ○花
史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆

ヲクラフ筵會アレハコレヲ
寂シヤウ美味トスルナリ

井堤蛙 袋草子日帯カ
草信始テ能因ニ

逢ニ時能因今日見泰ノ引
出物ニ見スベキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我
重宝長柄橋造ノ時ノ鉈屑

ト云テケレバ節信大ヒニヨロ
コビ又懐中ヨリ紙ニツクメルモ

ノヲトリ出シテ見セケル能
因トリテ見ルニカレタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎ニ又
フトコロニシテ帰リケル云

妙術 止蛙鳴 菊の未花咲
ころ枝のまふと更焼はて

鮎子取 東医宝鑑に青魚。カ
トコ 鮎のまハカトノコ

蒸鯨 差技裁前より生け魚
太さ大平境ありと遠干て

法がしゆり火くあつて合入
非むかき草教ふはぬれ衣其角

狂かまごのいせとろろこの塩おひ
つよいれぬ味てそあれ 道鐘

田螺 田贏一名田青。胡麻と
からしとこまじらる

妙薬 赤縣江 源法田はとハ
あや粉と白粉が加味

更齋と伝る法 田はの白と平と
ようとう松のみどりと塩がし

はしたるを粉としくとまじらる
松脂と田よしのむかふと加

らす粉とせりあわめ付へ
蝮 (異名) 河貝子。蝮蠃。螺。蝮

蝮ハ俗字ニ御慮に付くる
蝮角の塩ひたるかごらのごとし

ぬに肥ち尻後の俗ハゲキ云
非たよハつの毒汁平たいとれは三

妙薬 産後後門痛と伝す
はして付へしあんなの痛と伝す

いざな祭 三月三日と二三夜解
とて後境のまきことせし

寄居虫 形蟹こいにて境のまき
やがるあやかり貝

一名寄生 振云朝舞あらん
だのあよ一二入のこのあり

能事 振のまきこととははらば提亭
かたし向居のまき寄居虫て由

狂 ぶくはの上からほせよと
宿さくろのかひひるり 信海

馬刀 後の如なる馬の
の形あはれまてまきこと

能事 ころかき三月は仇敵連二
ははてまきまきの具もまき 千丈

狂 いらとまきことまきまき
のまきまきまきまき 宇羅

色落木 三才舎田まき不祥
まき鯛魚に似たり

能事 まきまきまきまきまき
ははのまきまきまきまき 白相

必用

はるハ三月一ヶ月必用
まきまきの法まきまき

破軍方向

夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
巳の方	午の方	未の方
卯六ツ	卯五ツ	辰四ツ
申の方	酉の方	戌の方
丑九ツ	寅八ツ	丑七ツ
亥の方	子の方	丑の方
酉六ツ	申五ツ	未四ツ
戌の方	酉の方	戌の方
辰九ツ	辰八ツ	辰七ツ
子の方	丑の方	寅の方
寅六ツ	卯五ツ	辰四ツ
卯の方	辰の方	巳の方

日刻

まきまきの日まきの刻
のまきの刻まきまき

出行作事 西南まき
まきまきまきまき

壬の日まきのまきまき
まきまきまきまき

樂事 是月まきまきの
まきまきまきまき

拾ひまきまきまきまき
まきまきまきまき

ろびまきまきまきまき
まきまきまきまき

さき 春系梅山とてこのころ
なり 酔に乘くと暮と惜そめ
あるはたのー死せりたに
れーまほの日月人んを
ともよ 偏なき 樂事
中村のさきかたりあると

天氣占候 是月卯の日
三あれの豆よ

素問曰丑の風はらうれば
人寒熱多しと入り甲子に
雷あまは大熱なる雨あまは
旱なる月ひりまられば災ある
乙未に足もまは秋米價高
西に足もは蠶糸もに厚し災
ありは月あま死を 早なり月
蝕はるは茶安し民に災あり
二月用さきくは 左り
あるす

養猫法 養まるとはとん猫初
紀時拾とやれ食法があらは

花壇土 け月を壇にまきすじ

製筆 け月より三月十日までに作り
制表くく筆と佳とすもハ秋ハ
九月に取らぬ毛白毛と良
はとす軸竹も同じ共は切と
利も竹と煎と利もはとひかす
毎く酒に硫黄と入して筆の
毛をたを舒とす筆の核はほ
果多生 梨石榴木等の枝を
るても其か枝相後のきたも
のさうらとほけ枝の下へたの
むやうよとととまある生とに

雑品 葡萄の根と根幹を
あけおくべし 墙垣に築く
べし 石葉の樹の下と春く
をーこのりとりととて草

木の根らさるにも社目をふり
の柄と根らさるくべし 提む
ふいとも生ととととととと
初年をさるの柄とかけるとはし

養生

二月天を映晴の目と
多しと三里終骨に受

とく一陽をたたらけ
ふせぐ并に友にゆり御

衝心の手まひま一と書養
叢書に足はさり但免究其

人の病を庇によりてとある
匠に右の二穴にかきくべし守

服神明散 舌の後神の腹を
備へ一蒼木 梧楸 附二 烏

頭 罌 炮 細辛 高 各 搗 て
散 紅 絹 の 袋 に 一 人 これ を

脊 に 帯 き 一 夜 病 は け り
の 腹 あ ら び け り せ ら ぬ を

服 た て の 妙 一 服 せ ら ぬ が
あ せ 出 て や ま じ っ ち 速 に 愈

子 を ま じ っ ち 法 け 月 丁 亥 の 日 書
花 と 挽 花 と 陰 子 は して 搗 じ し

戊 子 の 日 服 せ て の 妙 一 日
後 一 日 一 日 に 二 日 再 也

二月飲食 并 料理献立

禁 兔肉 二月 鶏卵 二月

忌 公を 黄花草 二月 痼疾を棄す

陳姐 二月 痼疾を棄す 日

陰流水 二月 瘡 梨子

二月 含み 二月 酸物

大辛物 二月 以 二月

料 汁 二月 二月

二月 二月 二月

二月 二月 二月

鱈

こい。かいろうま
ゆきうひめ
りりさけ

こらう。おひり
うじ。きんけ
らり。せうが

白うと。ほくし
美しそ。めん
さうが

坪

坪。ほつこ
こらう
ゆいご

指

しゆり
うらまき
ふんまき

ゆきり
りり
りり

ゆいご
こらう
こらう

二汁

塩か
おさ

半
ふけ

煮物

燻

白うと
ふんまき
ふんまき

吸物

ゆいご
こらう

和物

たこ
岩たけ
さき

和物

ゆいご
こらう

精汁

ふん
ふん

根いも
ゆいご

鱈

ゆいご
さき
さき

坪

ゆいご
こらう

旨味

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

二汁

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

煮物

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

吸物

和物

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

時魚

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

鳥

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

青物

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

梅

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

ゆいご
こらう

二月 集書
に抽取の後の上まで上りて
敷く入匠 抽取の下の白紙に紙蓋
して人の通らざるよう
用ゆる時 ぬれぬとよくたて
敷く入れぬ紙蓋して
ふくむは 抽取のけんまの
まのまの

尊菜海松煎法 こまこゆと
通しきの

あ一升塩一合ありを湯を
さかりりごとしとよくた
る

海流煎法 とぞく一升水
と去塩三合を

紙封して 塩を 欠く 換せ
用ゆる時 ぬれぬとよくた
る

本芽作法 きのみまつくろく
毎月海月を
の目と石を

すれあけハ 芽を出さ
とりにとりに 毎朝あさ
ら日よ 不とぶーとや
芽をいごととなり

二月終



